

編集・発行

うじいえ自然に親しむ会

事務局

さくら市ミュージアム

- 荒井寛方記念館 -

# うじいえ

# 自然に親しむ会だより

第13号

平成24年3月1日

## 平成23年度のこと

会長 加藤 啓三

東京大学鷺谷いづみ教授が、子供向けに書いた本「セイヨウオオマルハナバチを追え」(外来生物とはなにか)があります。この中で、「地域でとりくむ外来生物対策」のページに、本会の鬼怒川での「シナダレスズメガヤ抜き取り作業の取り組み」を紹介していただきました。本会はこの本を市内の小学校と中学校へ寄贈しました。

一方、子供達の環境学習としては3年前から、さくら市立押上小学校で「鬼怒川の自然」をテーマに本会の出前授業が行われています。今年度は新たに氏家小学校、南小学校が加わり、校外学習として鬼怒川河川敷やゆうゆうパークでシナダレスズメガヤの抜き取り作業を実施することが出来ました。

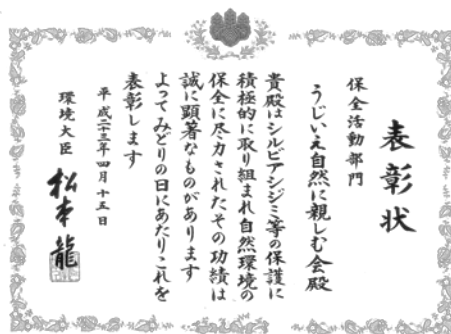
さらに、宇都宮市立旭中学校の道徳の出前授業で「鬼怒川の自然環境について」の話をしました。

栃木県立さくら清修高等学校の科学部が本会の行事にはじめて参加し、また、同校放送部は、本会の「シルビアシジミ保全活動」を放送番組として、栃木県高等学校文化連盟放送部会第30回放送コンテスト新人大会の番組部門に参加する予定で、現在準備を進めています。

シナダレスズメガヤ抜き取り作業には、宇都宮市環境学習センターの「鬼怒川再考講座」の受講者や、東京大学の大学院生が参加しました。この他、多くの方々に協力していただきました。

秋には、市内で「シモツケコウホネ」が発見されました。この「シモツケコウホネ」は栃木県内4番目の発見で、大阪市立自然史博物館の志賀隆学芸員の調査により、さくら市固有のものとわかりました。下野新聞や産経新聞の記事になりました。

4月に「環境大臣表彰」(環境省)を、11月に「下野ふるさと大賞 準大賞」(下野新聞)を受賞したことをご報告して、本会の活動にご理解、ご協力をいただいている会員の皆さまに深く感謝申し上げます。



環境大臣表彰



下野ふるさと大賞 準大賞

## 「確かな未来」は私たちの手で

真岡の自然を守る会会長 高松健比古

この冬、私の住む真岡市南東部の山沿いでは、最低気温が連日氷点下10度前後まで下がる厳しい寒さが続きました。凍結した田んぼの土の中で、カエルたちはどうしているか気になります。

さて、俳優で日本野鳥の会会長の柳生博さんは、講演などで「確かな未来はなつかしい風景の中にある」と話されています。柳生さん自らが茨城県霞ヶ浦に近い農村に育ち、いま八ヶ岳の森林再生に取り組んでおられますが、人と森や田畑との関わりの中で、農村のたたずまいが一朝一夕にできたものではなく、人々の暮らしの中で形成されてきたこと、そしてその里地・里山にこそ多くの野生の命が存在することを実感されての言葉でしょう。田んぼと小川やため池など、「水」の存在の重要性も同時に指摘しておられます。

私が今会長を務めている「真岡の自然を守る会」は、昨年結成40周年を迎えました。1971年の結成当時は、全国的に自然保護運動が盛り上がった時期でしたが、その運動の対象は、奥日光や尾瀬をはじめもっぱら貴重な原生林とか国立公園の自然など、私たちとはかけ離れた所の自然でした。むしろそれらは「地球の宝」的存在ですが、貴重さ故に守られる自然がある一方で、私たちの身の回りのありふれた林や川が、守るべき価値はないと切り捨てられ、破壊されたことも事実です。

真岡市には高い山も原生林もない。でも豊かな平地林や里山があり、鬼怒川などの河川もある。たくさんの野生の動植物が生きている。その郷土の自然を、そこで暮らす私たち市民が自らの手で守ろうではないか。――今でこそ当たり前になった考え方ですが、当時それを訴えて会を結成した先輩たちの慧眼には、今更ながら敬服しています。

21世紀になって、里地・里山は世界的な注目を集めることになりました。生物多様性保全の実例そのものだからでしょうか。生物多様性条約第10回締約国会議を契機として、「SATOYAMAイニシアティブ」が国際的に推進されようとしています。

カワラノギクやシルビアシジミをシンボルとして、「うじいえ自然に親しむ会」の皆さんが取り組んでおられる鬼怒川中流部の保全活動も、また、私たち真岡市民が下流で取り組んでいる鬼怒水辺観察緑地の保全活動も、いずれもこうした世界的な流れに沿うものだと思います。

市民が汗を流し、自らの手で郷土の自然保護に取り組む活動がなければ、どれだけ行政が予算を取ろうが広報宣伝に躍起になろうが、実際の効果はあげられません。

同じふるさとに生きる多様な野生生物と



真岡の鬼怒水辺観察緑地・オオバンの池

私たち人間。その両者が共に生きられる「確かな未来」を開くのは、私たち市民の自立的・自発的な活動です。鬼怒川が結ぶさくら市と真岡市の市民団体同士、お互いにこれからも楽しくがんばって行きましょう。

高松健比古さんは、NHK宇都宮FM(80.3MHz)「高松健比古のバードナビ」毎月第3火曜日の夕方「とちぎ6時です！」(18:00~19:00)の中で15分ほど野鳥の話を紹介しています。

日本野鳥の会栃木「おおるり」より

## うじいえ自然に親しむ会をもっと身近なものにするために

理事 佐藤 裕

今 手元にうじいえ自然に親しむ会準備会の案内がある(平成15年4月吉日)。準備会の加藤会長はここで次のようによびかけている。私たちは身近な動植物などの自然に親しみながら学習し、さらに自然の大切さを考えていくために「うじいえ自然に親しむ会」を発足させることにいたしました。堅苦しい規則などにしづられず、誰もが気軽に参加し楽しく活動の輪を広げていきたいと念じております。この翌月5月25日うじいえ自然に親しむ会が発足した。この時会員は30名、年間の行事計画は蝶、ホタルの観察会、カワニナとホタルの成虫放流、ミュージアムの企画展フェントンとシルビアシジミ発見物語への見学、鬼怒川の植物観察、標本作りなど9件とささやかなものだった。今、会員は196名(23年12月22日現在)年間行事は20数件におよぶ。この間私たちの活動が広く社会に認められてきたことはご存じのとおりである。

しかしここで述べたいのはそうした実績のことではない。私たち役員は年間4回の会合を持っている。昨年末、年1回の会報の発行を前に私たちは年間行事の検討や総会に続く記念講演などの内容を話し合っていた。その際出されたのが会の活動に対する次のような意見だった。『年間行事をみるといつも作業ばっかりの気がします』『自然に親しむシーンが少ないのではないのでしょうか』また、『この会は自然保護活動の専門団体なの?』『勉強会、環境団体化しているのではないの』『自然同好会ではダメなの』などと人から尋ねられることがあるのですけれど。

始めにもふれたがたしかに私たちの活動はそれなりの評価をえてきた。会員数も増えた。でも実際の活動に参加してくれる人たちは本当に少ない。どうしてだろう?上記のような指摘も一つの原因なのだろうか。保護活動と自然を楽しむことは別のことなのだろうか。

シンクグローバル、アクトローカルという言葉があります。考え方は地球規模で、でも活動は実情に合わせて、といったほどの意味でしょうか。100人いれば100通りの意見、考えがあります。会の行事に参加して俳句をひねってみよう。写真を撮ってみよう。おいしい空気を吸ってみよう。雑学雑知識をふやしてみよう。どれも正解だとおもいます。そんな行事ももっと必要かもしれません。ためになっただけでなく楽しかったということをプラスしたいものです。工夫が必要です。いずれにしてもまずは参加してみてください。皆さんの意見を聞かせてく

